

7世紀におけるベグラームの存立

桑山正進

カーピシー=カーブル地方でよく知られる円圏押印紋の年代は、円形稜堡とあいまって、ベグラーム第Ⅲ期の年代を引き上げる。円圏押印紋とは、直径3-5cmの円圏内に紋様を施した施紋具を、成形段階における生乾きの壺形土器などの肩部に、1種ないし数種組合せて複数回押してできた、土器の装飾である(図1; 図2)。円圏はもたないが円圏押印紋とともに組合せて押印した大型の印紋(図2: 39-48, 53)も本稿では便宜上円圏押印紋とする。円形稜堡とは、建物ないし城壁の外隅角や外壁面に付設された、平面が円形の塔形建築である(図3; 図4: 1-7, 10; 図8)。外壁面のもは通常半円形平面を呈するが、方形・八角形稜堡と区別すれば円形稜堡である。ベグラームの第Ⅲ期とは、Ghirshman がベグラームで発掘によって確認した3時期のうち、最後の、もっとも新しい時期である。かれによれば、第Ⅰ期はインド=ギリシア諸王末期から第Ⅰクシャーン朝、第Ⅱ期はカニシュカからヴァスデーヴァまでの第Ⅱクシャーン朝、そうして第Ⅲ期はキダーラ=クシャーン朝にあたり、その終末はエフタル攻破によるベグラームの放棄であって、第Ⅲ期終末の年代は4世紀ないし5世紀初頭をくだらないという[Ghirshman 1946]。

Ghirshman の与えた第Ⅲ期の年代は、『大唐西域記』にみえるカーピシーの王都城の所在とも深くかかわる。つまり、玄奘が訪れた630年前後ないし644年前後に存在したカーピシーの王都城がベグラームであったとすると、Ghirshman の与えた年代とはいったい何であったかということである。古くにCunninghamは、地図の上で、チャーリカールの北西、バグマーン山麓にあるオピアーンをあて、ベグラームを玄奘が帰途にカーピシー王に別れを告げた場所である瞿盧薩謗城(『大唐大慈恩寺三藏法師傳』巻5; 大正新脩大藏經50, 249c, l. 9)にあてた[1871: 16f]。オピアーン(Opian)にあてたのは、Charles Masson がそこで多くの古銭を収集したことや、地名がAlexandriam Opianesに通じるという理由からである。1922年より1926年にわたってアフガン=トゥルクスタンからパーミヤーンを通過してタキシラまでを踏査したFoucherは、王城をベグ



图1 円圈押印紋集成(1)

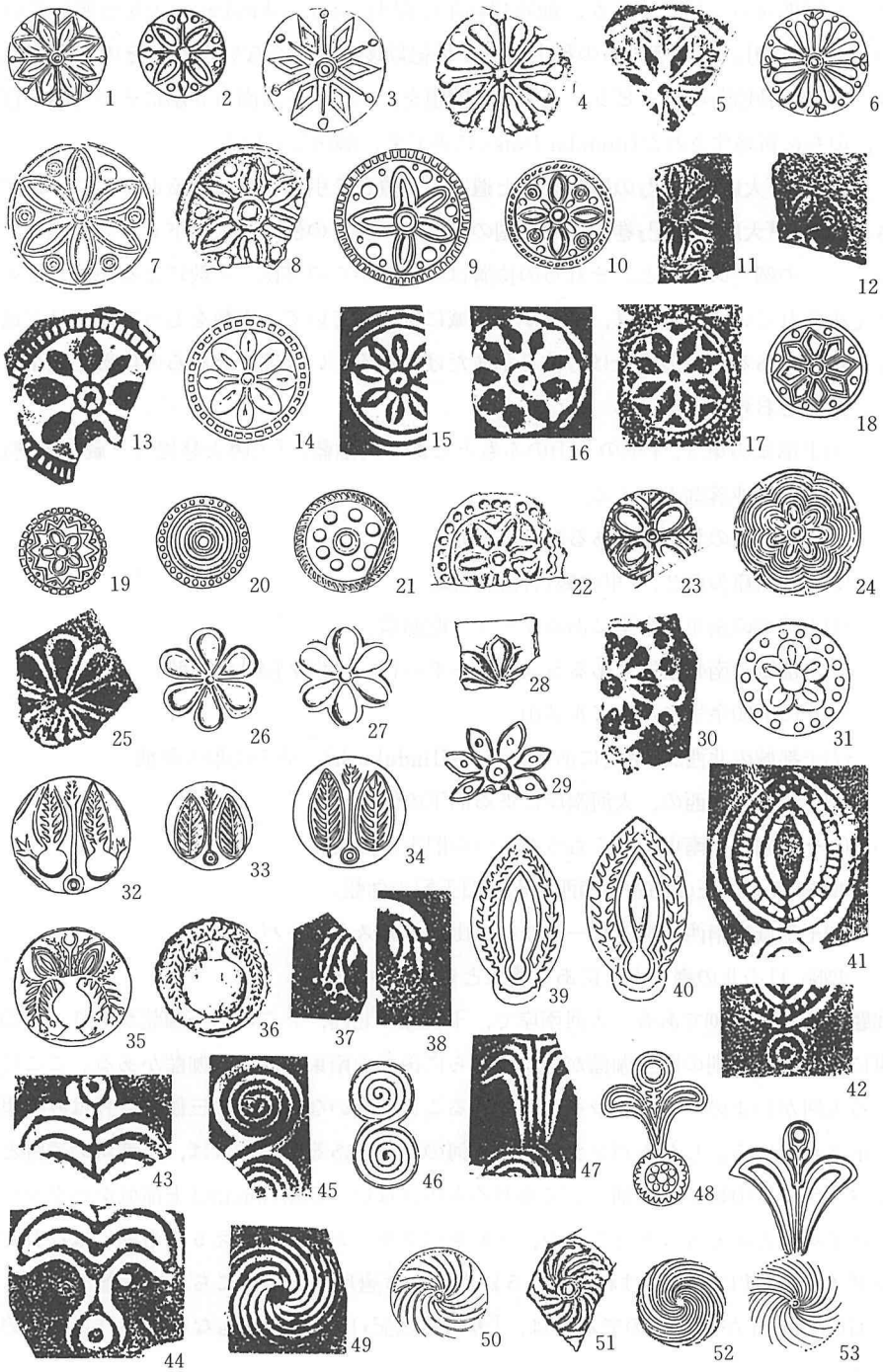


図2 円圏押印紋集成(2)

ラームに他ならないとするが、前年1946年に提出された Ghirshman 説を参照していない[1947:140]。ベグラームの最上層を5世紀以後には降らないとしたその Ghirshman は、『大唐西域記』のカーピシー王都城の問題を、ベグラーム南方5kmにその当時は存在し、のちに耕地化された Ghundai Paisa にあてて、解決している。

しかし、『大唐西域記』の聖跡記述と遺跡の位置とを引き較べてみると、これではすまされない。『大唐西域記』巻1迦畢試国の条には、多くの佛寺とヒンドゥー寺が記してある。二三の例をのぞくと、それらの位置は王都城からの方位と里数による距離とをもって定められている。例外は、佛寺が王都城に接近していて、里数をもって示すほど遠くない場合である。その場合は方位を示すだけである。いま逐一それらの位置を列挙すると、次のとおりである。

- (1)王都城の東3,4里の北山のふもとにある大伽藍。『大唐大慈恩寺三蔵法師傳』はこれを沙落迦寺とする。
- (2)この伽藍の北の嶺にある数洞の石窟。
- (3)この石窟の西2,3里の觀自在菩薩像。
- (4)王都城の南東30余里にあるラーフラ僧伽藍。
- (5)王都城の南40余里にあるシュヴェーター[シュ]ヴァ[タ]ラ祠城。
- (6)その南30余里にあるアルヌ山。
- (7)王都城の北西200余里にある大雪山(Hindukush), その山頂の龍池。
- (8)王都城の北西の、大河南岸にある旧王の伽藍。
- (9)その伽藍の南東にあるもうひとつの旧王の伽藍。
- (10)No. 8の旧王の伽藍の南西にある旧王妃の伽藍。
- (11)王都城の南西にあるピールサーラ山とそのストゥーパ。
- (12)No. 11の北の巖のもとにある龍泉とピンダカ伽藍。

問題は(8)と(9)と(10)である。大河南岸で、王都城の北西、そこに旧王伽藍があり、その南東にもうひとつ別の旧王伽藍がある。さらに後者の南東に旧王妃伽藍がある。ここにみえる大河がいまのパンジュシル河であることは疑いない。この三伽藍以外はみな里数で示されている。しかもパンジュシル河の南岸にあるのであれば、王都城の遺跡としてベグラームのほかには候補としてあがるものはない。Ghirshmanは王都城をベグラームにあてることができなかったから、それをベグラームからでさえ5kmも南にはなれたグンダイ=パイサにあてたけれども、5kmといえど唐尺でも10里にちかい距離である。もし Ghirshman が正しいのであれば、『大唐西域記』は里数をともなってこれら伽藍の位

置を示したはずである。グンダイ=パイサに軍配をあげることはできない。さりとて Ghirshman のベグラーム第Ⅲ期に対する年代観の訂正をこれですべて解決できたわけではない。

既に筆者はこの問題を取りあげ、ベグラーム第Ⅲ期の特色であるふたつの文化要素、円圏押印紋と円形稜堡とが、おそくも7世紀に同時存在したことを論証し、Foucher 説を追認した[Kuwayama 1974A]。ところが、私が使うことのできなかつた新資料と別見解が、カーピシー=カーブル地方の南なるワルダク Wardak を調査した Fussman によって提出された[Fussman 1974]。さらにローガル Lōgar の佛寺跡グルダラ Gul Dara の発掘資料も公刊され[Fussman et Le Berre 1976]、その遺跡が円圏押印紋と円形稜堡とをもっていることとともに、それらに対して Fussman は年代観を示した。次いで、Taddei は、筆者の論点と結論を詳しく紹介するなかで、Fussman の提出した資料や見解ならびに Taddei 発掘中のタパ=サルダール Tapa Sardār (Ghazni) の証拠に依拠し、とりわけ私が注目した二つの文化要素の同時性と年代は少なくともワルダクとガズニーでは支持できないと反駁する[Taddei 1978]。ここにそれらの新資料および1974年以降明らかになったタパ=シカンダル Tapa Sikandar における層位事実を加えて一部前稿を修正しつつ、再び Foucher 説を確認し、批判にこたえる。

I Begrām の発掘状況とその第Ⅲ期

タパ=シカンダルであらわれた新たな事実にふれるまえに、複雑怪奇なベグラームの発掘結果を整理しておく。ベグラームはフランス考古学派遣団によって、1936年に中央路をはさむ“バーザール区”の発掘があり[Carl 1959B]、1937年に第10室の発掘があり[Hackin 1939]、1938年に市内の稜堡つき建物と市壁外側との発掘があり[Meunié 1959A]、1939-1940年に第13室の発掘があり[Hackin 1954]、1941-42年に Ghirshman が中央路の西であらたな区域を開き[Ghirshman 1946]、1946年には Meunié が市の南門を発掘して[Meunié 1959C]、一連の検討を終えたのである。なかんずく第10、13各室の発掘では、いわゆる財宝が出土し、ベグラームの名はこれによって高い。その第10、13各室(図3)を遺跡の層位に正確に関連づけたのが Ghirshman の成果である。かれは、三つの時期にわたる建物群が上下にあい重なっていることを確認した。地山の上につくられた第Ⅰ期。第Ⅰ期の建物残壁を利用してその上に積んだり、あらたに造ったりした建物からなる第Ⅱ期。財宝室であるふたつの部屋はこの時期のものであった。そうして、プランの方角を北北西にずらしてこの第Ⅱ期の上に造成したのが最後の第Ⅲ期である。

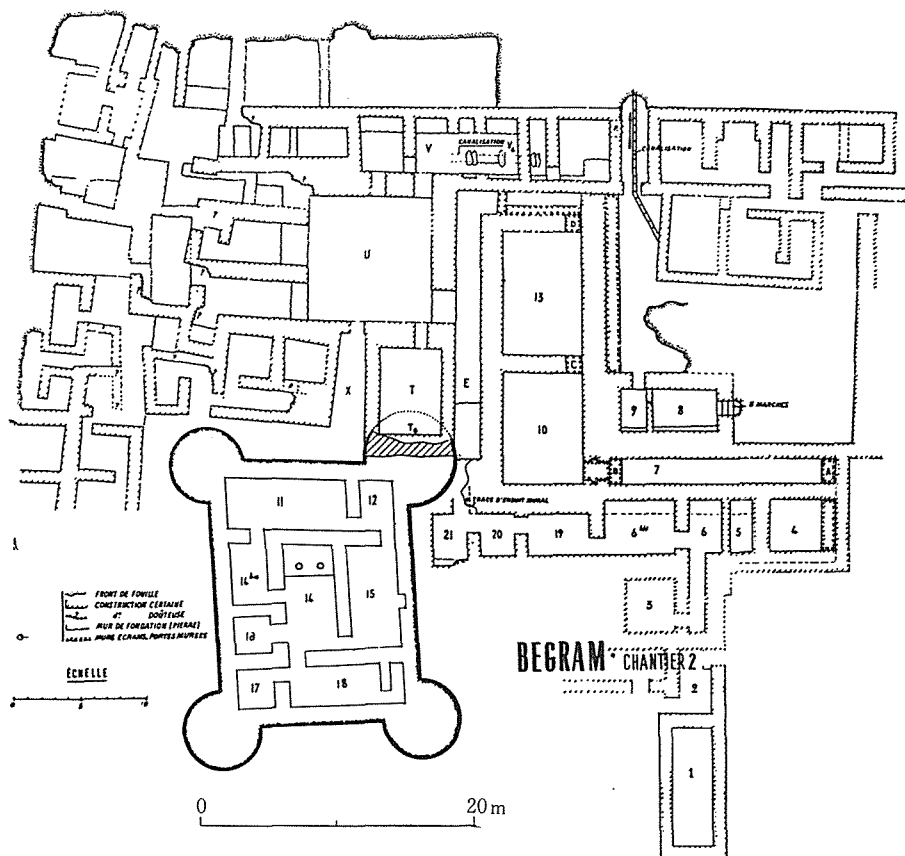


図3 ベグラーム第2地区(第Ⅱ期プランと第Ⅲ期後壁建築)平面図(Hackin 1954による)

数次にわたって発掘がおこなわれたベグラームは、発掘全般をみとおした正報告がまだ公刊されていない。したがって各発掘区域相互の関連がいちじるしく不明瞭である。就中 Ghirshman のベグラーム3時期設定はベグラームの歴史をとらえた点において現もっとも依拠するにあたいする成果であるが、1936、1937、1938、1946各年に各区域であきらかにされた層位とそれにかかわる事実、1959年に公刊されたにもかかわらず、なんら整理されたものではなく、発掘ノートそのままを間に合わせに移記したような粗略なものであり、Ghirshman の得た3時期にも対応させる手続きを踏んでいない。そこでまず各区域相互の関連をみておく必要がある。

Ghirshman は、1941-1942年の西方区の発掘における3時期におよぶ建築の確認にお

いて、次の重要な事実を認めている[Ghirshman 1946: 23-32]。ベグラームがはじめて建設されてから第Ⅱ期まで、この都市は漸次発展した。方形稜堡をつけた市壁は第Ⅰ、第Ⅱ期を通じて使われる。市内の建築も、第Ⅰ期のものが第Ⅱ期にもそのまま使われる場合があり、第Ⅰ期のものが使用に耐えぬ場合には泥煉瓦を積んで補修し、あるいは第Ⅱ期において新しい石積法にしたがって建築する場合もある。したがって、この新建築法による壁があるところでは第Ⅰ期から第Ⅱ期へ移行したことがすぐわかるが、それ以外のところでは、室内の床面の重なり方とそれに伴って変化する貨幣の種類によって、時期が変わることを確認せざるをえない。しかし、第Ⅱ期と第Ⅲ期との建築における違いは歴然としている。第Ⅲ期では、その建物が前代の残壁の上に連続して建つことは稀であると。

第Ⅲ期の建物は前代の遺構を基礎として使うことがほとんどなかったのである。この事は、そのとき前代の建物が地表にめったに露出していなかったということを指示している。前代の遺構がそろっていれば建築のための地盤としてこれを利用する事が普通である。Ghirshman の観察のなかに、第Ⅲ期の建設に際して前代の遺構が埋め立てられたという事実はないから、第Ⅲ期に建築が始まった時点において、前代までのベグラームは、埋め立てをおこなわなくても地表が十分堅緻であるほどに、廃墟と化していたのである。ベグラーム第Ⅲ期は、第Ⅱ期の終末から随分時間がたったのちに、新たに建設された都市として位置付ける事ができる。だからその市街はGhirshman のいうように建物平面の軸が北北西にむいて第Ⅱ期までの壁の方向とはことなっているのであるし、第Ⅱ期の建物が基部だけ、あるいは上まで全部、伐りだした片岩を積んだのに対し、第Ⅲ期ではいわゆる河原石を使うのである。すなわち、ベグラームは建築上、地山の上に建設された第Ⅰ期から次の第Ⅱ期までが連続した性格を保っているのに対し、最後の第Ⅲ期は前代と不連続である。ただし第Ⅰ期に建設された市壁はその15mにおよぶ厚みによって第Ⅲ期に至っても残存し、利用された。1946年に Meunié が発掘した市門とは、第Ⅰ期の建設にかかる市壁の市門を措いてほかにはない。その付近にて第Ⅲ期の特色である押印紋土器が出土しているからである。

建築における傾向は土器にもいえる。第Ⅱ期の土器は全体の傾向として第Ⅰ期と同傾向の土器を生産し、特に新たな型式といえば黒彩紋の杯形土器であり、この時期に消滅する型式は灰黒色土器である[Ghirshman 1946: 54]。しかし第Ⅲ期には黒彩紋の杯形土器が消滅し、あらたな施紋として円圏押印紋が出現する[Ghirshman 1946: 69]。この手の押印紋土器は第Ⅲ期だけの型式である(La troisième et dernière période de l'oc-

cupation de la “Nouvelle Ville royale (ベグラームのこと)” a livré, elle aussi, une céramique qui, par certaines formes, constitue une suite logique de la poterie usitée antérieurement. Mais, de même qu’aux deux époques précédentes l’art des céramistes manifestait ses particularités en changeant les goûts et en introduisant des traits nouveaux, de même cette dernière époque marque ses propres préférences. Celles-ci sont très importantes et se traduisent par deux faits : a) disparition du décor peint ; b) apparition d’un nouveau décor estampé qui devient de plus en plus largement utilisé. [Ghirshman 1946 : 69]).

Meunié と Carl は1936年にベグラームの中央路 rue principale, すなわち市門から北へつづいている大路の西側の一部を発掘し、バーザール区となづけた。その記録は発掘区域の平面図と遺物リストと9行に充たぬ記述しかない[Carl 1958B : 84-102]。1937年にはまた、中央路の東を少しく開き、西側とおなじ状況を確認している[Carl 1959B : 102]。その記述によると、主要な出土品は、円圏押印紋土器と青銅器と鉄器である。ある室群では二つの住居層(deux niveaux d’occupation)があり、上層はカニシュカ、フヴィシュカ、ヴァスデーヴァの貨幣により、下層はヘルマイオス、ソーテール=メガス、ヴィーマ=カドフィセスの貨幣によって、年代が与えられるとしている。したがって1936-1937年の発掘における二つの住居層は、出土の貨幣だけから判断するなら、Ghirshman の第Ⅰ期と第Ⅱ期とにあたる。すなわち“バーザール”はGhirshman の年代観によるなら第Ⅲ期ではない。しかし、Ghirshman の確認した層位では円圏押印紋土器があればその層位は第Ⅲ期である。押印紋こそはその新出の文化要素だからである。これは大いなる矛盾である。この矛盾が年代設定を出土の貨幣ばかりでおこなったわるい結果であることはいうまでもない。貨幣は貨幣自身の年代と同時期の地層から出土するばかりでなく、はるかに後の地層からも出土する[Bernard 1964 : 217]。Carl や Meunié が二つの住居層にあてた年代はGhirshman の層位発掘を基準にして訂正さるべきである。

しかし、Ghirshman もまた別の意味で誤っている。出土貨幣の正確な情報をあたえない。どんな貨幣がどれほど出土したかを層別に示さないばかりか、貨幣に関する記述は至極粗略である。Les monnaies les plus récentes attestés dans cette seconde ville sont celle de Vasudeva, le dernière roi de la seconde dynastie kouchane, dont la date généralement supposée était 220-230 ap. J.-C. であるとか、第Ⅲ期に関しては、Les monnaies mises au jour dans la ville III, exclusivement en bronze et anépigraphes,

appartiennent aux émissions de la III^e et IV^e dynasties kouchanes, et sont de deux types : type I, Av. le roi devant l'autel. R. Siva et bœuf ; type II, Av. le même. R. la déesse Ardokhosho trônant [Ghirshman 1946 : 97, 99]。

Rois indo-grecs, rois indo-parthes, rois indo-scythes, rois de la première dynastie kouchane という分類とその出土量との記述はあるが[Ghirshman 1946 : 85-87]、それは貨幣自身の分類と数量であり、発掘データとしての記録は提出されていない。かれの目論みはベグラームの発掘とはまったく別の、貨幣と文献とによるクシャーン王統譜の作成である。それをベグラーム発掘で得られた第Ⅰから第Ⅲ期に当て嵌めただけである。第Ⅰ期は第Ⅰクシャーン朝に属し、第Ⅱ期は発展して第Ⅱクシャーン朝をむかえたが、そのヴァスデーヴァのとき、サーサーン朝はシャープールⅠ世の攻勢によって241年に終末をむかえ、その後サーサーン支配下におかれたクシャーンは、キダーラのときに復興して、ベグラームにも新市街(第Ⅲ期市街)をつくり、それはまた400年前後にエタフルの侵入によって放棄されたと。ベグラームの発掘による諸事実から導きだされた結論ではない。カニシュカ即位を144年におく、Ghirshmanのクシャーン史が前提にある。したがってベグラーム遺跡が本来示すべき年代の実相にGhirshmanがどれほど誠実であったか、はなはだ疑わしいのである。Ghirshmanの発掘成果にしてここで利用に耐え得る事実、極端に言えば、建築の3時期とその変遷のありかた、および出土土器の様相しかないのである。

次に1938年に発掘された第二区(市内)と第三地区(市外)とをみる。両地区において四隅に円形稜堡を備えて他から独立した建物が出現しているからである。第二地区のこの手の建物は南北にながい長方形平面で、外隅に円形平面の稜堡をつけている[Meunié 1959A : 104, Fig. L1](図3)。中央に円形平面の一室(No. 14)があり、その周囲に7室がある。No. 14の北側は一段高く、その上に東西にならんだ二つの小礎石がある。壁のつくりは、下から1 mまでを河原石の入念な石づみとし、その上はみな練土積(pakhsa)である。稜堡も腰を河原石積とするが、その高さは4 mもあり、建物本体のそれより3 mもたかい。腰壁の上部構造は練土積と泥煉瓦積とを交互におく。建物内のNo. 18室東端の小室より貨幣2と円圏押印紋土器が出土している。また、第三区の発掘は市壁から400 m南にある比高4 mの小丘でおこなわれ、外形も平面も第二区の建物とにかよった建物があらわれた[Meunié 1958B : 106, Fig. L2]。ここでは建物は、東西が若干長めの、ほとんど正方形にちかい平面をもち、内部は四室にわかれ、東側のNo. 2室が南北方向の長方室、西側が南北に並ぶ3室である。建て方は、基部を市内の建物と同じよう

に石積み(不揃いなブロックを、間隙に小石をうめて積む)とし、その上部は高さ30cmの練土を幾段か積む。

これら市内と市外とで明らかになかった二つの稜堡建築は、バーザールと同じく第Ⅲ期に属する。既に Meunié が、市内のものを第Ⅱ期に属する室 T の残壁の上に建ち、室 T より新しい時期のものとして認め[1959A:104](図3), Ghirshman もそれを第Ⅲ期としているからであり[1946:37], 特に市内のものは円圏押印紋土器を出土しているからである。すなわちこの室 T とは、財宝を出土した第10, 第13室の西に隣接し、通廊 E をへだてた西側の一連の室群に属し、第10, 第13室と同時期の建設である[Ghirshman 1946:67, Fig. 26]。Ghirshman は、円形稜堡を多数例示して年代を検討したが[1946:37f], 市外のものにはまったくふれていない。一方 Meunié は、両者が外観上類似している点を強調して、両者が同時期である可能性を示唆している[Meunié 1959B:106]。

1946年にはベグラーム最後の発掘が市壁の南門でおこなわれた。Meunié は、市壁と市門が、Ghirshman の確認したベグラーム第Ⅰ期に、建設されたことを認める一方、層位は二つの時期にわかれ、上層は市門の路面にあたり、一括で出土したヴァステーヴァ貨幣65枚がこの時期の終末をしめすという。市門の両側にはまた方形の基台が対になってあらわれている[Meunié 1959C:107, Fig. M1]。かれはこれをストゥーパと考えて、この時期が防御より仏教を優先した時代、即ちクシャーン時代であるなどとする。また市壁の外側には市門を塞ぐようにして南へとのびた建物群がある。市壁の存在が無意味になった時代でなければそのような建物群が市門の前面につくられるはずがない。市外へ居住がのびた結果、円形稜堡つき防護施設が第三地区の住居区の南端に建設されたとする[Meunié 1959C:107-113]。かれは、上層の時期の遺物として、円圏押印紋土器をあげる[Meunié 1959C:112]。既に Ghirshman がベグラーム第Ⅲ期のものとしてこの型式の土器を位置づけている。1946年における市門とその外側との発掘によって現われたものは概ね Ghirshman の第Ⅲ期のものである。ここで思い出されるのが、1936-1937年に円圏押印紋土器を伴出したバーザール区の2層の住居層である。同じ発掘者が市門とこれにつづく中央路においてそれぞれ二つの層位をえている。それぞれの地区において円圏押印紋土器をえている。バーザール区も市門付近においても、Meunié たちは、Ghirshman の第Ⅲ期にあたる地層のみを発掘し、その第Ⅱ期の地層には至らなかったと考えられる。

つまり、1936, 1937, 1938, 1946年に発掘がおこなわれた、市内の中央路とそれをまたぐバーザール区、室 T の残壁の上につくられた市内の稜堡建築、中央路の南端にある

市門とそれに付随する市門外の建物群、さらにそれより400m南にある市外の稜堡建築。これらは円圏押印紋土器を出土しているという一点においてみなベグラーム第Ⅲ期に属する。そうしてバーザール区と市門区とで二つの層が検出された事実は、第Ⅲ期がさらにふたつの時期に分かれることを示唆している。また、市内の稜堡建築とバーザール区との相互の層位関係はまったく調査されていないけれども、稜堡建築は第Ⅲ期のうちでも後期のものであるかもしれない。この建物は基礎を第Ⅱ期の室T残壁におくけれども、いま残る壁の高さは3mであり、第Ⅲ期のはじめから存続したものと考えるがたい。市門の外側に住居があふれて市門が無意味になった時点の建築である。市門外400mの稜堡建築とあわせてその用途を考える必要がある。Ghirshmanは円圏押印紋が第Ⅲ期に出現したのち、ますますその利用がおおきくなったとのべ[1946:69]、第Ⅲ期の上層ほどこの種の土器加飾が増加傾向にあることを伝えている。

ベグラーム第Ⅲ期の土器について Ghirshman が報告したものは、押印紋土器片のデザインを除いて、わずか97個体にすぎず[Ghirshman 1946:Pls.XLIX-LIV]、そのうえ型式の分類もなければ、出土頻度の記録もない。ただ手当たり次第に図化したものを掲載した印象である。また土器図も形態の微妙な特徴を殺したものである。それにもかかわらず、その土器のなかには、タパ=シカンダルの第Ⅱ期にあらわれる土器を相当に含んでいる[Ghirshman 1946:Pls.XLIX, B.G.516; LIII-29,31; LIV-51, 52, 53, 54, 55, 60, 63, 64, 65, 66, 72]。土器型式の共有は両遺跡が同時代をともに生きたことを示す。

II Tapa Sikandar の証拠

ベグラームから南へ60km、おなじくカーピシーの境域にあるタパ=シカンダル(図4参照)は、プレ=イスラーム時代に2時期、17世紀初頭に1時期、都合3時期の建築をもつ。それをいまそれぞれ第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ期と次第によぶ。第Ⅰ期の終末と第Ⅱ期の開始との間の時間は相当に永く、第Ⅱ期はのち述べるように7世紀30年代にはすでに存在し、8世紀に十分及んでいる。

第Ⅲ期17世紀の建物は遺跡のもっとも見晴らしの良い東の高台にある(図4.dECJ以東)。そこは7-8世紀の第Ⅱ期においても枢要の地区であり、壮大なるがゆえにその時期の建築が廃墟として17世紀にもまだ残っていた。だから第Ⅲ期には、第Ⅱ期の建物は壁の上部構造である泥煉瓦積部分が取り去られて四周に放擲され、壁の下部構造である石積の上端が削平され、その上に練土積(pakhsa)による邸宅がたった。邸宅の遺構からは極めて多量のイスタリーフ式青緑釉の陶器に明末清初の染附が少量混じって出土し、

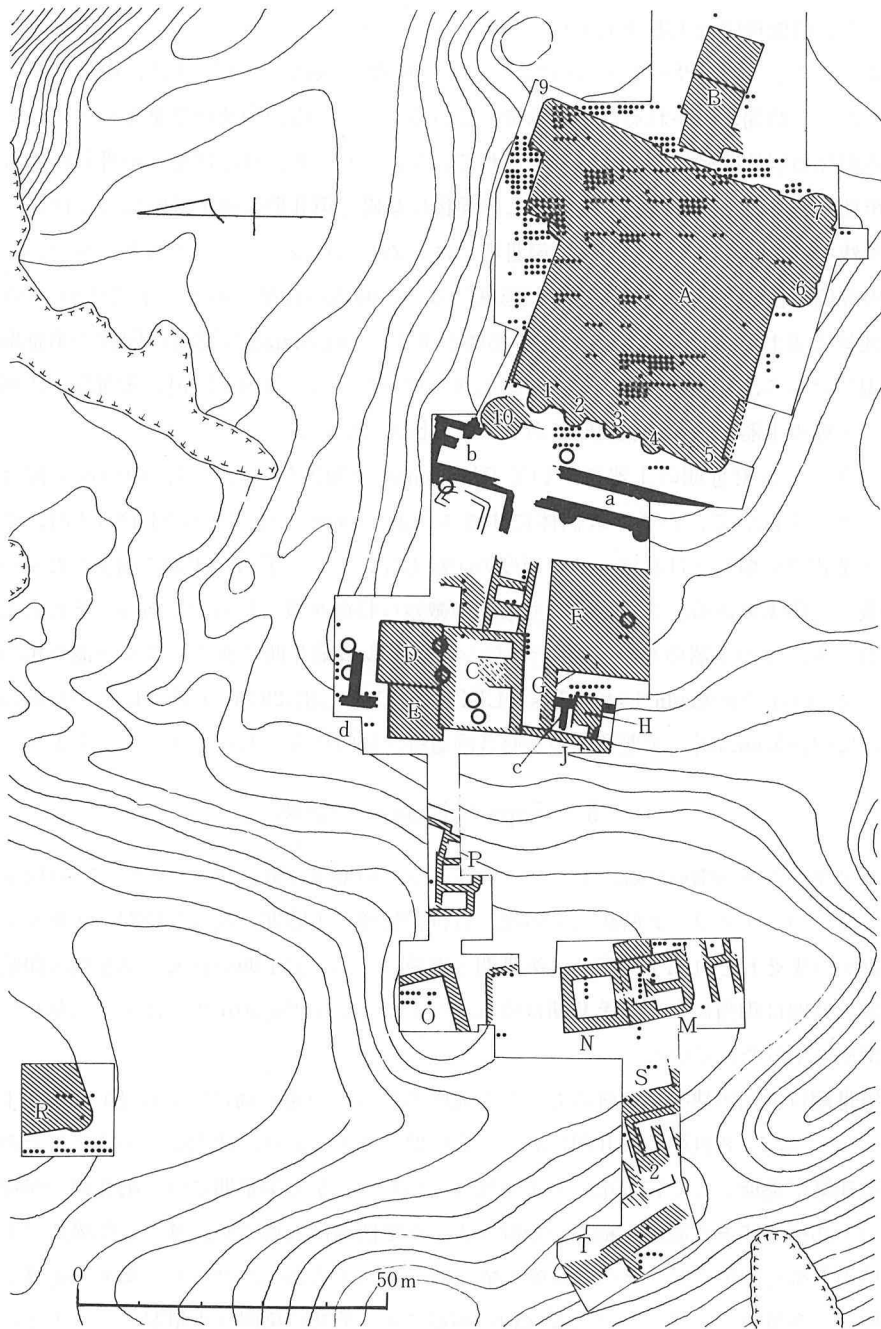


図4 タバ=シカンダル主要部. 黒点は円圏押印紋土器片出土地点. 円は大理石像ないし断片の出土地点

第Ⅲ期に確実な年代を与える。

しかし、この地区で第Ⅲ期の邸宅建設の犠牲になった前代の建物におおきく二つの時期があることは、1970年[Kuwayama 1972: 5-14], 1972年[Kuwayama 1974B: 5-13], 1974年[Kuwayama & Momono 1976: 5-15]の発掘の最初の3回では未だ把握できず、1976年にいたって[Kuwayama 1978: 5-12], 層位関係が確認されるに及び、はじめて第Ⅰ, 第Ⅱ期を設定することができたのである。1976年以前においても、第Ⅲ期にあたるとは考えられない石積の壁があり、その壁面の石組に精粗3種あることは観察されていた。つまり、(1)伐りだした小型の板石を大きさを揃えて、少々大きい石とともに密に組む整齊な壁[Kuwayama 1976A: Illus.3], (2)やはり伐りだした石を組むが、まず大石を主にして設置し、その間隙を小板石か小さめの伐り石かで充填していき、ジョイントを使わない、大胆にして堅固な壁[Kuwayama 1972: Illus.14-15]。もう1種は、(3)河原石をそのままか、すこし打ち欠いて、ジョイントに練り土を十分に使いながら組む壁である[Kuwayama 1972: Illus.16]。(1)は図4のa, b, c, dなど黒くぬりつぶした壁にあたり、いずれも岩盤上につくられ、aでは半円形の稜壁を西側につけている。aとbとのかかわりは不明である。dはDEの北側にあり、T字形に残るだけであるが、東端と南端は、壁の幅に合わせて彫りだした岩盤自身に壁を接続させるという手間のかかった造り方である。岩盤自身に対するこのような細工は、bが西へ直角に曲がる部分でも観察された。FとPが(3)の石組であるほかは、AからSにいたるすべての建物(図4の斜線の建物)が(2)の石組をつかっている。この石組には大きい石と間隙の小さい石との大小の差により、いくつかの種類があり、A,B,C,D,E,R,Sのように規模も大きく、建物の基台をつくる場合と、K,L,M,N,Qのように室の壁をつくったり、Hのように小規模の基台をつくる場合とでは異なっている。

石組(1)をつかう建物a-dと石組(2)(3)をつかう建物A-Sとが、それぞれ第Ⅰ期と第Ⅱ期に属することは、基台Hと壁cとの上下関係及び建物Fの造り方によって確認された。Fは非常に大きな建物であるが、B,C,D,Eのように石組(2)をつかって建物全体の基礎を石積にするのではなく、石組(3)をつかってまず建物の範囲を壁で囲う。地山が東から西へ傾斜しているが、こうして積んだ石積の最上列は水平である。囲われた内部に泥練瓦を敷き積んで建物全体の基礎を完成する。Fのこの泥練瓦積の中に、石組(1)による壁の残骸(建物の入口部分)がとりこまれている[Kuwayama 1978: Illus.16(J1をみよ)]。入口にいたる岩盤の床は深さ20cm、長さ2mにわたって掘り削られ、壁dとおなじやり方である。取り込まれた壁はFの建設に先立つものであり、またその残りの状態から見て、

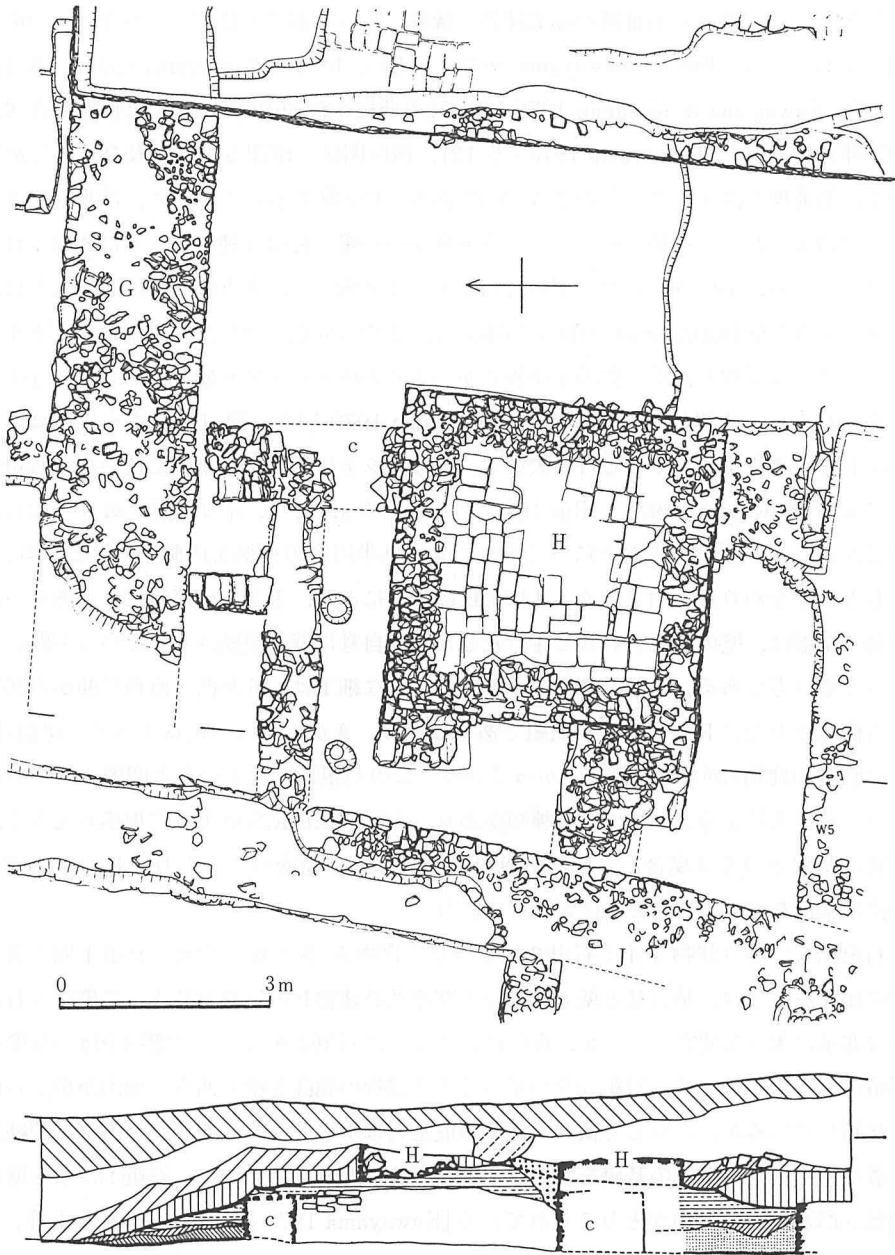


図5 建物Hと壁cとの関係(平面図・層位断面図). タバ=シカンダル(Kuwayama 1978による)

Fが建設される時点までかなり長期にわたって放置されていたことがわかる。一方、Fが建設されてからその西に、小さい方形の建物H(4.7×4.5m)をつくる必要があった(図4;図5)。Fから西にかけて地山の岩盤はさらに傾斜の度を増している。またこの時点で壁cはほとんどその最下列の石組を残すだけであった[Kuwayama 1978: Illus.8, 9]。そのために壁Jを建物Cの南西端から南へ造り、さらに壁GをFの北西端から西につくって、FGJで囲む空間を設け、その中を土で埋め立てた。こうして地山の傾斜を解除し、埋め立て土の上にHを造ったのである[Kuwayama 1978: Illus.7, 17](図5)。したがって、タパ=シカンダルの高台である東半では、Fにおいて壁a,b,c,dの石組とおなじ石組の取り込みが認められたこと、およびHとcとの層位関係がきらかになったこと、これらの事実によって、壁a-dを第Ⅰ期、建物A-Jを第Ⅱ期とすることができる。このことはのちに述べる土器の様式差によっても確認できる。

低い西半部の発掘は、1978年[Kuwayama 1980: 5-15]におこなわれただけであるから、ごく一部が判明しているのにすぎない。既にいちど崩れた城壁を内側から支えるような具合に、きわめておおきな塊石を組んで大規模な基壇S(高さ3m)を地山の岩盤に築き、その上には、側壁に狭い入口をつけ、ヴォールト天井をもった長方室S2(長さ約8m)を建てる[Kuwayama 1980: Illus.17]。石組の大基壇が完成した後に基壇に向って東方から岩盤上を流れ降って堆積した、2層からなる堅緻な地層がある。そのうち上層は炭をまじえた灰褐色土である。これを平らに削って2室連結の建物MNが立つ[Kuwayama 1980: Illus.15](図4)。これとおなじ地層の上に建物がQがあり、さらに北方に50mほど離れて、稜堡を備えた建物Rがある。これらの建築は石組(2)にしたがっている点で東方のA-Kと同じく第Ⅱ期に造られたものである。

ただ、ここで注目すべきことは、Mの西室出土の土器である。ここでは室の床面いっばいに総計24個体の壺と甕とを主とする土器が原位置そのままに土圧によって押し潰されていたが、押印紋土器はただ1個体の壺に確認されたのみであり、しかも紋様は珠点5個を梅花様に五角形に配した簡素な紋様である。内城で出土したきわめて多様な多数の押印紋のなかに、実はこの押印紋は含まれていない。大基壇に対して流れ降ったふたつの堆積層の上にこの押印紋土器を出土した建物が立っていることをあわせて考える必要がある。すなわち、堆積層の性格がはっきりするまではなんともいいがたいが、大基壇を内城やその西の建物群と仮に同時期とみると、Mはそれよりおそい時期の建築であるとみることもできるわけである。もしこれが認められるならば、シカンダルの第Ⅱ期の遅い時期には押印紋がこのように簡素になり、また使用が極度に減少したと解釈でき

ぬこともないのである。

第Ⅰ期の建物の石組は、cが立ち上がり高さ20cmほどの高さ、a-bも30cmほどしか残っていない。石組の上に泥練瓦を積んだのか、練土を積んだのかもわからない。露曝状態にあって傷み、第Ⅱ期の建設において一層破壊が進んだ。あちこちに壁の残骸が残るばかりで、建物の性格などとうていわからない。これに対し、第Ⅱ期はこの遺跡における主要な時代であり、大規模な建設があい次いだ時代である。内城Aはたび重なる改築で原形は不明であるが、円形稜堡1,2,3,4,6,7[Kuwayama 1974: Illus. 1, 3, 4]と附加壁9[Kuwayama 1974: Illus. 5, 8, 9]をもつ現状のプラン以前に、北西端と南西端にも円形稜堡があった。それらの部位が直角や隅丸の壁に改築されていて、改築後の壁の石組が元の石組と微妙に異なっていることからわかる[Kuwayama 1974: Illus.10]。さらにそれ以前に、円形稜堡10を付けた大規模な建物があったらしい。立ち上がりが高さ十数センチしか残らないこの稜堡10の跡が、内城Aの下に続いているからである[Kuwayama 1978: Illus.10]。

建物Fとか、石組基台しかのこらないDE(Cの付属建物)、門口の施設であるらしいRなどを別にする、BもCもNもS2もみな宗教にかかわる建築である。Bは内城東壁にとりつけられた細い壁をともなう神祠であり、S2は壮大な基壇上のヴォールト天井つきで長方室(長さ約8m)であり、奥壁には壇を設け、壇の上方の壁にはアーチ型の龕をつくっていて、生活の場とはおもえない[Kuwayama 1980: Illus. 3-5]。方形の建物MN(Mがさきに建った)を連結した建物のうちNも、何らかの宗教儀礼の用を担っていた。ヴォールト天井・長方平面の三部屋からなるMの北に接して、附加された内法6.3mの方形室Nは、Mの北の小部屋M3を経由して外部に通じていたが、のちにM3とNとをむすぶ出入口も閉鎖された。1mというきわめて低い壁(石積み腰壁の高さ40cm、その上の泥練瓦積が6段60cm)の四隅にスキッチを使ってドームを架設している。部屋の周辺では頭がつかえるほどである。このNには相重なる4面の床が認められた。最初の床の中央には床深くから泥練瓦を積んだ直径1.6mの三重の同心円筒があったらしい。2回目の床の時期にそれは破壊され削り取られたので、泥練瓦の三重同心円が残っているだけである。その中心約40cm平方には煉瓦がなく、そこだけ火にあたって橙色に焼けている。また部屋の一隅には、鳥形の水瓶を逆さに設置し、あるいは上半を欠した甕を低いベンチに並べ、大きな石板上で水を用い、土管で室外に排水する。煮沸用の土器などの出土は一切なく、火と水を用いる普通の生活の場としては道具立てが入念にすぎる[Kuwayama 1980: 9-11. Figs.14,15,20]。建物Hもまた、その平面の規模か

らみて住居ではなく、神祠の可能性が高い。

これらの建物がヒンドゥー教の信仰や儀礼にすべてささげられていたと結論できはしないが、すくなくとも建物 C (16×13m) はシヴァ神祠であった。C は、奥行 5 m の泥練瓦積の仕切り壁によって、向拝部 C 1 と後堂 C 2 とに分かれる。仕切り壁はその幅広さからみて単なる仕切りではなく、上部構造に尊像龕をいくつかもっていたであろう。向拝部の奥壁、つまり仕切り壁に接して、南西向きで、大理石ウマー=マヘーシュヴァラ像が正立して出土したからである。この彫像は神像と銘文帯と像を固定する粗削りのままの部分から成るが、シヴァの頭部、三叉戟を握む左上臂、そしてパールヴァティー上半身などが像の南側の泥練瓦の上に打ち落されていて、そのレベルは粗削り部の前面、銘文帯より下であった [Kuwayama 1972 : Illus.12-13]。このことは像が原位置から動いたのちに破壊されたことを示すとともに、動かされた時点で向拝の床もきわめて荒れていたことを示す。

大理石ヒンドゥー神像はウマー=マヘーシュヴァラ像のほかにも 8 点出土したが、すべて断片で、第Ⅲ期邸宅の造成が行われたときに、攪乱されたことをその出土地点と出土状態が示している (図 4 : 出土地点は小円で示した)。しかし出土地点はみな内城の西側で、しかも建物 C までの間に限定されているから、祀られていた建物は CDE ないし H であった可能性が当然高い。このほかにタパ=シカンダル西側の畑から耕土中に獅子像が 1973 年に偶然出土し、また Degens は、タパ=シカンダル出土という大理石の像基台がカープル博物館に長年所蔵されていることを報告している [1964 : 35]。これらを含めて、カーピシー=カープル、ガルデーズ、ラグマーン各地から従来二十数点の大理石ヒンドゥー神像が知られている。それらの像は彫刻の細部要素において共通し、またその要素の大部分は 7-8 世紀の同時代にヒンドゥー教とともにおこなわれた、バーミヤーン、フンドゥーキスターン Fundūqistān, タパ=サルダール Tapa Sardar, あるいはウシュカル Ushkar やアクヌール Akhnūr などの仏教の造像にも見られる。一連の大理石ヒンドゥー神像は 7-8 世紀に帰属する [桑山正進 1971 : 165 ; 1972 : 1-54 ; Kuwayama 1972 : 8-11 ; 1976 : 375-407]。そのうちタパ=シカンダルのウマー=マヘーシュヴァラ像とガルデーズ出土のガネーシャ像とは基台に鋭角ブラーフミーによるサンスクリット銘があり、ウマー=マヘーシュヴァラ像はヒンドゥーの三大神を讃える 3 行、ガネーシャ像は建立の由来を述べる 2 行である。字体はグプタ=ブラーフミーを直接継承する 6 世紀後半のものであるが、一部にインド本土の 7 世紀後半から 8 世紀にかけて現われるナーガリー字体の特徴をもち [山田明爾 1971 : 168-175]、上の型式上の年代観を裏付

ける。

ただし出土した遺跡がわかっているのは、タパ=シカンドルとハイル=ハナ Khair Khanaだけである。ハイル=ハナには下層の神祠と上層の神祠とがある。下層の神祠を埋め立てた上に造った上層の神祠からは少なくとも1軀のスーリヤ像が出土している [Hackin 1936: 4]。上層の神祠は『大唐西域記』巻2にみえるカーピシーの聖跡の(6), すなわちアルヌ山であり, 下層の神祠は『隋書』漕国の条に記載された葱嶺山の淫祠であり, 上下両神祠の交替は606年と630年との間である [桑山正進 1982: 1067-1086]。606年は、『隋書』西域傳の資料源のひとつである裴矩『西域図記』の撰述の年であり, 630年は, 玄奘がはじめてカーピシーへ到ったと考えられる年である。ハイル=ハナすなわちアルヌ山とおなじく、『大唐西域記』に列せられているのがタパ=シカンドルであり, 「罽蔽多伐刺」の祠の城である。括弧内をジャイナ教の白衣派であるシュヴェータンバラの音写とみる可能性もあるけれども, パーシュパタの系統であるシュヴェーターシュヴァタラの訛音シュヴェータヴァラの音写とみれば, ウマー=マヘーシュヴァアラ像の出土とその銘文の内容とも絡まるのである [桑山正進 1971: 166-167]。これらの諸点によりタパ=シカンドル第Ⅱ期の年代は7-8世紀であり, 6世紀後半にやや遡る可能性もないではない。

ところでタパ=シカンドルで出土した土器は, 上に述べたイスタリーフ式陶器及びそれと同時期の素紋素焼き土器を除くと, 3式に大別される [Kuwayama 1978: 12]。第1式は器形も復原できるほどに大きな破片はなく, 量の上でもいちじるしく少なく, 長期にわたって曝されたことをしめしているが, 形式として壺形, 椀形, 鉢形, 杯形があり, 胎土は精良で茶褐色, 厚い赤褐色のスリップをかけている。焼成温度は第3式土器にくらべ, 低い。杯形のもの断片のなかにベグラーム第Ⅱ期に特有の黒彩紋が認められる [Ghirshman 1946: Pl.XL, BG117, BG150, BG207, BG348]。また壺形にはナガラハーラ地方 (Jalalabad) の都城とおもわれるチャハル=バーク Chahar Bagh 一帯で採集される型式, 浅い鉢形にはさらに東のチャールサダ Charsada のパーラー=ヒサル Bala Hisar 遺跡で出土した型式を含んでいる [Wheeler 1962: Fig.32, 284]。第2式は第1式と同じ胎土で灰色, 内外面とも灰黒色の軟質土器であり, 形式も小型ばかりの壺形と鉢形を主とし, 出土量は第1式の50%に満たず, みな小片ばかりである。これもまた第1式と同様に長期の露曝の結果である。

土器総出土量の80%が第3式である。焼成は堅緻, 胎土には微量の細砂をふくみ, 雲母粉を混ぜたものもあり, 第1式, 第2式とはまったく異なる。暗褐色ないし暗赤色の

スリップを薄くかけることを特徴とする。豊富な型式をもつ壺形、壺を大型にしたかたちの甕形、大型の鉢形などが主流である。第3式土器の顕著な特色は、他2式にはみられない円圏押印紋の装飾である。大多数は3-5cmの円圏の中に動物(水鳥・孔雀などの鳥類、鹿、馬)(図1:16, 19-23, 25, 29, 30, 33-35, 38, 39, 44, 47-51)、植物(花華、樹木)など(図2:5, 11, 13, 15-17, 25, 30, 37, 38, 41-45, 47, 49)を表したものであり、少数が円圏なく杏仁様のモチーフと渦巻きを組合せたものなどである[Kuwayama 1974B: Illus.29-30]。この紋飾をもった形式は壺形に限定されるが、甕にも1例ある。押印紋はほぼ770点採集されたが、これは土器の固体数ではない。冒頭にのべたように同じ印紋を組合せることが普通だからである。しかしこの膨大な数量の印紋の存在はタパ=シカンダルで第3式土器をつかった時代に押印紋がおおいに流行したことを示している。出土地点をドットすると(図4)、出土のありかたにひとつの方向があることがわかる。居住を目的にした内城Aに集中し、宗教施設と考えられる建物跡からはきわめてすくないのである。

これら3式の土器中、第1式と第2式とは、胎土や形態そして出土状況からみて、ひとつの様式であり、第3式とは明確に区別される。すなわち出土状況とは、第Ⅱ期の建物Qから、嘴に環を銜えて頸にリボンを翻した水鳥を円圏のなかに表した押印紋をもつ甕が出土したこと、そして第Ⅱ期の建物Hと同時期の地層(図5:断面図縦線の地層以上)で第3式が出土したことである。一方、埋め込まれた第Ⅰ期の壁cに伴う土器は、第1、第2式土器に限られている(図5)。円圏押印紋をもつ第3式土器は第Ⅱ期の土器であり、第1、第2式土器は第Ⅰ期の土器である。

タパ=シカンダルの第Ⅱ期は長期にわたる大規模な建設の時代である。その建設は第Ⅰ期の建物がこわれ、放置されたのちにまったくあらたな時代としておこなわれたものであり、第Ⅰ期とは不連続な存在である。このありかたはさきにも述べたベグラームにおける第Ⅲ期の開始ときわめてよく符合する。ベグラームでも第Ⅱ期と第Ⅲ期とは不連続であり、円圏押印紋土器は第Ⅲ期にはじめてあらわれる。タパ=シカンダルでも同じ状況が観察される。ベグラーム第Ⅲ期出土の土器はその細部の特徴を微妙に殺した図面によって他の遺跡出土の土器と比較することをなかなか困難なものにしているが、それでもなおタパ=シカンダル第Ⅱ期の土器とその主要な型式において共通することはさきののべたとおりである[Ghirshman 1946: Pls.XLIX, BG516; LIII, 29, 31; LIV, 51-55, 60, 63-66, 72]。さらに、ベグラーム第Ⅱ期特有の黒彩紋杯形土器がシカンダル第Ⅰ期に混入している事実は、ベグラーム第Ⅱ期とシカンダル第Ⅰ期とがある時期平行

関係にあったことをおぼろげながらしめしている。

円圏押印紋土器が、ほかの性格をもつ遺跡ではなく、カーピシー=カーブル地方において現在知られているふたつの主要な城市ベグラームとタバ=シカンダルにおいて、きわめて類似した環境の下に出現したことが重要である。この二つの都市からあらわれた証拠は、円圏押印紋土器の出現が、あるいは6世紀まで遡るかもしれないが、確実に7世紀であることを示している。しかも Ghirshman が「ベグラーム第Ⅲ期において円圏押印紋の使用は次第に増加する」と述べることははなはだ意味深い。なぜならば Ghirshman は第Ⅲ期が複数の亜時期にわかれることに言及していないからである。次第にふえるということは、亜時期なくしては存在しえぬ発言であり、円圏押印紋がこの地方ではじまった次第をベグラーム遺跡の再発掘によって確認できる可能性がきわめて高いことを示唆する。

Ⅲ ワルダク城市跡とタバ=サルダール佛寺跡

筆者は、ベグラーム第Ⅲ期を絶対年代に位置付けるために、ベグラーム第Ⅲ期とタバ=シカンダルとが共有する円形稜堡建築と円圏押印紋とに同時期性をもとめた [Kuwayama 1974A]。そのおおきな理由のひとつは、ベグラームを擁するカーピシー=カーブル地方において、円形稜堡建築をもつひとつの遺跡ないしひとつの遺跡のうちのある時期では、かならずこの手の押印紋土器を伴っていると考えたからである。しかし、タバ=シカンダルではやや異なった事実が1976年にあらわれている。壁 a は第Ⅰ期であるから、円形稜堡は第Ⅱ期に先立って存在する。タバ=シカンダルの第Ⅰ期に円圏押印紋土器はないので、円形稜堡は円圏押印紋に先立って現われたことになる。その意味では、このふたつの文化要素がカーピシー=カーブル地方における出現の当初から同時性をもっていたとはいえない。ベグラーム第Ⅱ期とタバ=シカンダル第Ⅰ期は、各々の遺跡においてこれらふたつの文化要素が出現する前の時期であり、この前後の時期の間には時間のギャップが認められるという共通点がある。ベグラーム第Ⅱ期とタバ=シカンダル第Ⅰ期が完全に同時代を共有したという証拠には土器様式の一致が必要である。報告されたベグラームの粗末な土器図からはタバ=シカンダルの土器と対応させることが多くの場合むずかしい。研究の現状では、ベグラーム第Ⅱ期とタバ=シカンダル第Ⅰ期とはある期間においては平行関係にあったけれども、完全に同時代を共有したと断言することはできない。したがって、タバ=シカンダル第Ⅰ期に円形稜堡があっても、ベグラーム第Ⅱ期にも円形稜堡があったとはいえないのである。カーピシーにおけるこのふ

たつの都市の証拠から現れる事実は、ふたつの文化要素が、ベグラーム第Ⅲ期とタバ＝シカンダル第Ⅱ期という時代、すなわちおそくも7世紀からは同時性を保つことになった、ということである。

ヒンドゥークシュ北側のトハーリスターンでは、おそくともアイ＝ハヌム Ai Khanum (前3世紀中葉-前1世紀中葉)が代表するバクトリア時代から稜堡は方形であり、南側でもベグラーム第Ⅰ期やタキシラ第Ⅲ都市(シルカプ)などの、はやい時代は方形稜堡をつかったが、その後南側だけはタキシラ第Ⅳ都市(シルスフ)から円形稜堡にかわる。一方押印紋もヒンドゥークシュ両側でつかわれたが、北側と南側とでは紋様や形が根本から異なる。北側のものはアームー河中流兩岸に分布し、植物紋を主とした小型に限定され、5世紀ほどまでは使われたけれども、それ以後は消滅する。南側では地域としてカーピシーからガズニーまでにあらわれ、東はラグマーンに及んでいない。直径3-5cmの円圈の中に動物・華などの図紋を入れ、大きさの点でも図紋の点でも北の印紋とはおおいに異なっている。このような状況の中で、北側のバグラーンにあるコフナ＝マスジド Kohna Masjid の名でよばれる小城塞は、北側の伝統ともいべき方形稜堡に加えて、北側ではたえて存在しなかった円形稜堡を導入している。しかもこれまた北側にはそれまで存在しなかった、南側と同じ型式の円圈押印紋で飾った土器を若干伴っている。発掘者は出土したワラフラーンⅣ世発行の銀貨によってこの城塞を5世紀としたが [Bernard 1964]、筆者は、バグラーン＝クンドゥズにおける押印紋を含めた土器の変遷のなかへこの遺跡を位置付ければ6-7世紀にあたる事実を確認した [Kuwayama 1974A]。その後1978年にこの遺跡の土器に関する専論 [Veuve 1974] を F.Grenet の好意により閲読してこの年代を確認することができた。円形稜堡・円圈押印紋はヒンドゥークシュ南側の限定された地域の文化であるから、コフナ＝マスジドはこれらをヒンドゥークシュの南からこの時代に受け入れたに相違ない。このきわめて興味深い現象が認められるなら、北側の土器による編年上の証拠から、南のこのふたつの文化要素の年代が押さえられる。ベグラーム第Ⅲ期の年代は Ghirshman が考えたよりはるかに後までさがる。すなわち7世紀にベグラームは生きていたのである [Kuwayama 1974A]。

さて、ヒンドゥークシュの南側の円形稜堡の年代については従来2説ある。スルフコタル Surkh Kotal, ベグラーム, シルカプといったクシャーナ期の稜堡がみな方形であり、ガンダーラ仏教彫刻にえがきだされた市壁の稜堡もまた方形ばかりである [Ingholt 1957 : Figs.103,151,152,464 ; Mizuno 1962 : Figs.122,123 ; 1969 : Pl.42,8 ; 松岡美術館 No. 944-12, 21]。しかしシルカプに次いで建設されたシルスフ市壁の円形(半円形)稜



図6 タバ=サルダール西斜面平面図(Taddei and Verardi 1984による)

堡を Marshall はヴィーマ=カドフィセスとかカニシュカ時代に当てる [1951 : 218]。Ghirshman もこれを認める [1946 : 39]。疑問を提出したのは Schlumberger である。 [1963 : 193 ; 1964 : 88, f.n.6]。イランにおける円形稜堡はパルティア時代にはなく、サーサーンのシャープール I 世ころに初めて現われるのであるから、シルスフのものも 260年より古くはないと。

19世紀に Masson [1841 : 117-118] が踏査したことのあるワルダクにおいて Fuss-

mann は数回の調査をおこない、円形稜堡をもつ城市跡と少なくとも四つの佛寺跡などの存在をあらためて提示し、きわめて価値の高い資料を提供した[1974:65-130]。その年代に関する論点は要するに次のとおりである。かれは採集した土器片から円形稜堡の年代を求める。採集した土器はすべて「クシャーナ期」のものでベグラーム第Ⅱ期や第Ⅲ期の土器に対応するが(Fussman は Ghirshman のベグラーム編年をコメントなしに受け入れている)、わけても円圏押印紋土器は「まったくない(totalement absent)」[Fussman 1974:89-90]から、ワルダク城市はベグラーム第Ⅱ期にあたる。円圏押印紋はスルフコタルにもベグラーム第Ⅱ期にもタキシラにもシェイハーン=デリー Shaikhān Dheri にもない。シェイハーン=デリーはヴァスデーヴァ時代をもって終末をむかえる。したがって円圏押印紋はヴァスデーヴァ以後に現われたもの。ワルダクの城市はしたがってヴァスデーヴァ以前であり、その円形稜堡もまたこの年代であると。円形平面のストゥーパを造ることができた人たちが円形の稜堡を造れないはずがなく、Schlumberger や Ghirshman のように他の地方に年代の枠を求めなくても、この地方のみの技術で十分円形稜堡は造れるのであり、Marshall 説は是認できるというのである。つまり Fussman によれば、ふたつの文化要素が同時性をもつのはヴァスデーヴァ以後のことである。

一方、Taddei によると、タパ=サルダールの西斜面に造られたストゥーパ64は片岩敷石の床(floor)の上にたち、敷石の周辺の床は土をつき固めている[Taddei 1972:382-383; Taddei 1978:267](図6)。この敷石とは、実は前の時期に造られた、片岩を組んだ構築物の上面の一部である。この構築物が火災によって傷んだのち、上面のレベルで平らにならしたとき、土の床もともに造ったのである。床の周縁にはそれぞれ少しづつ土の床に沈みこみながら構築物がある。構築物のうち南側のものは、薄くちいさな片岩でつくったミニアチャの城壁69である(図6, No. 69)。方形・半円形・半截八角形の稜堡を附けている。城壁の基礎は土の床にしているが、のちにやや床が上がったので、城壁のいちばん下の石の列をこのあたらしい床土がややおおうことになった。この床に文意不明のブラーフミー文字がぎざまれ、3世紀ころのものに当てることができそうだという。円圏押印紋をもつ土器片を含む、多量の土器片がこの土の床下から出土した。したがって、円圏押印紋は3世紀以前から存在し、方形・円形・八角形の各種の稜堡も3世紀にはすでに存在した。つまり Taddei によれば、ふたつの文化要素の同時性は3世紀にはすでに存在するというのである。Fussman と Taddei は同方向の見解である。

ワルダクの土器はみな表面採集である。表面採集から遺跡群全体の展望を望むことは

できない。それにしても Fussman の観察にはおおくの疑わしい点がある。つまり、まず第一に、円圏押印紋は「まったくない」のではない。Fussman 自身が実はその存在を認めながら、あまりにも少ないので無視したのである。ひとつの佛寺跡と城市跡から各一片が採集されている。770点が出土したタバ=シカンダルでは、発掘に先立つ表土の調査に際しては僅かに4点を収集したにすぎない。しかもその大部分は内城Aで出土したのであるが(図4：小黑点は出土地点)、発掘に先立つ内城の表面採集では1片もこれを与えていない。1点しか収集しなかったといっても、このワルダクの城市に円圏押印紋土器の時代がなかったという証拠にはならないし、無視することはできないのである。Fussman によればこの押印紋土器は、Fragment de panse de jarre : pâte grise-rose grossière, avec points noirs et blancs de dégraissant. Engobe extérieur beige avec traces d'engobe noir par-dessus. であって、Traces du bord d'un grand estampage circulaire avec un semis de cercles en relief, comme *Begram*, Pl.L, BG506(Begram III) ou *Diverses Recherches*, Pl.II, 8(Tepe Marandjan)が認められる[Fussman 1974 : 103, No. 90]。この押印紋のうち、前者、ベグラーム第Ⅲ期とおなじものは、ベグラーム=バーザールでも出土した[Carl 1959B : 89,5,6](図1 : 46)。Fussman 自身の報告したローガルのグル=ダラ寺跡にもある(図1 : 45)。テペ=マランジャンのもの(図1 : 40)はタバ=シカンダルのものに類同する[Kuwayama 1972 : Fig.18]。さらにFussman が採集した土器を検討すると、ベグラーム第Ⅱ期にのみあらわれるものも確かにみとめられるが[Fussman 1974 : Fig.29, 7-10, 17; Ghirshman 1946 : Pl.XLIII,38,40,44]、そこには[Fussman 1974 : Figs.3,4,11,12,13,18]ベグラーム第Ⅲ期の土器[Ghirshman 1946 : Pl.LIII,29; Pl.LIV,66]もあり、これはタバ=シカンダル第Ⅱ期に普通の土器であるから、ワルダクの城市はタバ=シカンダル第Ⅱ期やベグラーム第Ⅲ期、あるいは円圏押印紋の点ではグル=ダラとも同時代を経験した。つまり7-8世紀にも存在したことになる。

また Fussman の論点の重要なポイントである次の点もはなはだ疑問であるといわねばならない。スルフコタルの押印紋はさきにのべたヒンドゥークシュ北側に特有の小型の押印紋である。それがベグラーム第Ⅱ期に存在しないのはいうまでもない。ガンダーラのシェイハーン=デリーにも確かにない。しかしシェイハーン=デリーを含めて北西インドではいかなる時代にも円圏押印紋は使われなかったのであり、たとえシェイハーン=デリーがヴァスデーヴァ時代をもって終末をむかえたとしても[Dani 1965-66 : 24-26]、円圏押印紋の使用をヴァスデーヴァ時代以後にあてる証拠にはならない。その証拠は円圏押印紋土器がごく普通に用いられたカーピシーからガズニーにわたる地方

において求められなければならない。ベグラーム第Ⅲ期、タパ=スカンダル第Ⅱ期、ワルダクにみられる土器の共通性からみて、ワルダクの城市をヴァスデーヴァ以前のみにあてることはいかにも不当である。筆者が1974年に Ghirshman によるベグラームの年代を批判した時点ではタパ=スカンダルの層位関係とそれに基づく時期設定は不明であったので、私はタパ=スカンダルのすべての円形稜堡を同時代とした。その後、壁 a は第Ⅰ期であることが判明したので、それに付随する円形稜堡もまた第Ⅰ期である。第Ⅰ期はベグラームの第Ⅱ期とある時期平行する。Ghirshman がベグラーム第Ⅱ期にあてた年代はカニシカからヴァスデーヴァまでである。Ghirshmanの年代はさきののべた理由で直ちには従いかねるが、たとえ正しいとしても、Fussmanの論拠からはワルダクの円形稜堡がヴァスデーヴァ以前だとはいえないのである。

次にタパ=サルダールから出された問題である。Taddei はストゥーパ64の周囲に造られた土の床にかかれたブラーフミー文字を、[It] would seem attributable to the 3rd century とのべて [Taddei 1972 : 383], きわめて慎重である。慎重ついでにもう少し違った角度からこのブラーフミー文字を検討すべきであったろう。この字体はたしかに3世紀ころの字体を維持している。しかし文字が読めないほどに変形した点を考慮しなければならない。タパ=スカンダルのマヘーシュヴァラ碑文は、インド本土からみれば辺地ともいふべき東部アフガニスタンに在って、字体が真正の鋭角ブラーフミーからやや逸脱し、あるいはナーガリーの要素を示しながらも、十分意味の通る碑文である。タパ=サルダールの字体が3世紀の字体を保持しつつも、判読しにくい程度に変貌していることは、この字体がこのあたりで受け容れられてからいわばアフガン様へ変わってしまった時間の経過を考慮せねばならないのである。Taddei が3世紀ころの字体としたのは当たっているが、刻まれた床の年代までも3世紀としたのは受け入れがたい。この文字の写真や図 [Antonini 1979 : Tav.VII ; Taddei and Verardi 1984 : Drawing 6] はかならずしもわれわれに正確な判断を許すものではないが(図6), 文字の頭の逆三角に、鋭角ブラーフミーが既に存在し、それとの混同をみることも不可能ではあるまい。鋭角ブラーフミーの初現はボードガヤーの Mahānāman 碑文2点とヤムナー河上流発見の Lakkhā Maṇḍal 碑文であり [Fleet 1888 : 274f., Pl.XLI ; Bühler 1892 : 10f]。前者はグプタ紀元269年の年紀、つまり588-589年であるから、6世紀のごくすえにあたる。タパ=サルダールの床のブラーフミーがアフガニスタンのかかる場所で何を書いたかわからぬほどの字形になっていることを考慮すると、床の造成ははやくても7世紀ではあるまいか。ストゥーパ64が建っているのはそれより以前にあった建物を削平したその

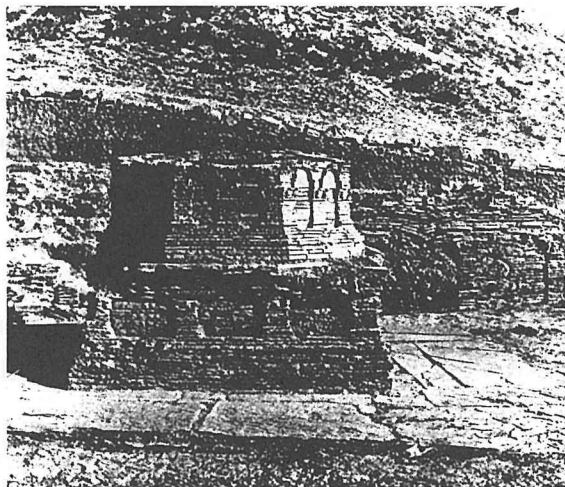


図7 ストウパ64とその床 (Antonini 1979による)

上面である。床はこの上面のレベルまで埋め込みをして造ったものであるから、床の下になった埋め込みの土は自然の堆積ではなく、一時におこった埋め土(filling)である。したがって埋め土のなかの遺物は床の上のものと同様に時期は開かない。床の下は必ずしも床の上より古くはない。床の上のストウパ64は第2層が八角形であり、つかわれたストウパの石材はうすい片岩である(図7)。うすい片岩ばかりでストウパの四面をつくることは、カーピシーを中心とした地方の晩期仏教寺院、たとえば8世紀のフンドゥキスタン寺院のストウパなどにみられるように [Hackin 1959 : Figs. 144,147,148], ふつうの現象である。八角平面の建築も、タパ=サルダール寺跡自身の後期にみられ、パーミヤーンでは二つの大佛の足下や東方の石窟に集中し、タフテバーヒヤタキシラのダルマラージカーでもみられるように、7ないし8世紀の構造である。このストウパ64と同じ床にある、方形・半円形・半截八角形稜堡つきミニアチャ城壁69も、ストウパ64と同じくうすい片岩で造り、7ないし8世紀であり、床のしたの埋め土から出土した円圏押印紋土器もまたこれと同時代であることは疑問の余地がない。このようなワルダクやタパ=サルダールから提出された、ふたつの文化要素に対する年代も、Ghirshman がベグラーム第Ⅲ期にあてた年代を支持するものではない。

円形稜堡は、タパ=シカンダルの証拠から、円圏押印紋土器に先立ってカーピシーを中心とする地方に出現した事実が判ったけれども、ベグラームとタパ=シカンダルにおける円形稜堡と円圏押印紋はおそくとも7-8世紀において同時性を保っている。この

場合、この二つの遺跡と同時期であるハイル=ハナに、円形稜堡は存在したのに円圏押印紋土器の報告がない。これは遺跡の性格による。ハイル=ハナは神祠遺跡である。タパ=シカンドルにおける円圏押印紋土器片の出土分布をみると、宗教施設におけるその出土はきわめて少ないのである(図4)。ただしハイル=ハナでは1964年に1片のロータス模様をあらわした円圏押印紋土器片を採集したことを付け加えておく必要がある。

IV カーピシー=カーブル地域の編年へ

円圏押印紋土器を出土する遺跡はこのほかにもあり、カーピシーからガズニーに至る。ショトラク Shotorak(図1:31; 図27:14), テベ=マランジャン Tepe Maranjān(図1:5, 7, 11, 13, 14, 15, 18, 24, 32, 40, 41; 図2:18, 20, 31, 35, 40, 46, 48, 52), サカ Saka(図2:1, 6, 10, 21, 24, 26, 27, 53), グル=ダラ Gul Dara(Lōgar)(図1:3, 4, 10, 45; 図2:12), ハム=ザルガル Kham Zargar(図1:6, 12; 図2:3), ジャガトウー Jagatū(Wardak)[Scerrato 1967:11f. Figs. 47-48]などが知られている。ハム=ザルガルやジャガトウーを除くと、どこもみな円形稜堡を伴っている。サカは小城塞, ジャガトウーは住居跡らしい。そのほかは佛教寺院である。タパ=シカンドルをふくめてこれらの遺跡の円形稜堡には、とくに建物の隅角に円形稜堡を附ける場合に共通する特色がみられる。稜堡を建物本体につなぐやり方である。つまり90°隅角の外側に円形平面の稜堡を単純に取り付けるのが普通であるのに対し(図3), 壁を一旦鈍角か直角に内側に屈折させ、屈折した壁のさきに稜堡をつけるのである。タパ=シカンドルの内城の南東隅(図4:6-7), テベ=マランジャンの南東隅(図8のB部分)[Carl et Hackin 1959:8, Fig. C], グル=ダラの北東隅(図9)[Fussman et Le Berre 1976:Pl. VI], ショトラクでは寺の南西にあるもの[Meunié 1942:10], サカ城塞跡ではややこれらと異なるが、稜堡GやHがこの種のものの変形であろう[Carl 1959A:14, Fig. D]。これらの取り付け方を観察すると、みな後に必要あって円形稜堡を取り付ける際の工夫であることがわかる。90°隅角に円形平面の塔形構造物を単に取りつけるのでは一旦建ったとしてもはなはだ頼りない。そこで元の建物に沿って比較的幅の広い壁をあらたにつくり、このあたらしい壁に稜堡を造るのである。だからショトラクのいちばん東の場合のように、後補であっても、建物本体自体からが後補である場合は、このような方法をとっていない[Meunié 1942:10]。このやり方でつくられた稜堡のある遺跡は、それを後に取り付けたという点で、少なくともふたつの時期をもっていたことを示している。発掘の新古を問わず、発掘当事者の観察の粗相さ加減によって報告に記述が漏れている事実をかく掘り起こす

ことができるのである。

これと同様に Fussman も、テペ=マランジャンの公表されたプランが発掘時の写真や記録から読み取れる事実と異なっていることに注目して、この佛寺の変遷をあとづける [Fussman 1976 : 95f.]。俗なる建物が佛教寺院へと変ることはこの地方ではまずなかったと私には思えるのであるが、Fussman はこの遺跡をいわゆるひとつの *qal'a* であった時代と佛寺となった時代にわけた。 *qal'a* はふたつの方形室とひとつの長方形室で構成され、外の四隅に円形稜堡をそなえた方形建物である (図 8)。長方形室の北隅には後の時代に付けられた階段があり、階段の第三段目の壁を掘り窪めて 373 枚のサーサーン銀貨 (4 世紀末) と 12 枚のクシャーノ=サーサーン金貨が丁寧に隠されていた。次に佛教寺院としての時代が到来する。この建物の西にストゥーパがたてられ、 *qal'a* の西壁の西外面にふたつの龕が「ほりこまれ」(発掘者 Carl の用語 *creuser* による [Carl et Hackin 1959 : 7])、それぞれに佛坐像と菩薩坐像とが安置された時期である。報告の平面図は龕をひとつしか描いていないが、実際にはふたつである。この時代には、次いで、 *qal'a* の西の出入口が閉塞され、 *qal'a* の北西稜堡と南西稜堡とをむすぶ幅 90cm の壁がつくられて、壁龕もみな塞がれ、同時に同じ幅の壁をストゥーパの四周につくったという。Fussman によれば、貨幣を僧は所有できないから、隠置されていた金銀貨は *qal'a* の時代のものであり、 *qal'a* の年代は 4 世紀。佛龕の坐像は 8 世紀のフンドゥキスターンの塑像より古いから、佛寺の年代は 6-7 世紀であると。

Fussman は Carl の「*creuser*」という用語を疑問視するのにとどめたが、方形建物の西壁にある龕は「ほりこまれた」ものではない。この龕の天井を観察すると、泥煉瓦を組んでアーチをつくっている [Carl et Hackin 1959 : Figs. 5, 6, 12]。既存の堅い泥煉瓦の壁に穴を開けてアーチを組むなどということは、どんな性格の遺跡からも報告された例がないし、また実際問題としてもそんなことをするはずがない。アーチの壁龕はしたがってこの建物と一緒に造られたのである。このことは、方形建物とストゥーパとが同時に一對のものとして造られたことを示している。つまり建物の西にストゥーパなくしては佛龕の存在を考えがたいからである。このとき建物に稜堡はついていなかったであろう。方形建物は、石灰を混ぜた、 $50 \times 50 \times 15$ (cm) という大型の泥煉瓦でつくられ、一方、稜堡はかなりおおきい河原石を基礎に積んだ上に、 $38 \times 38 \times 9$ (cm) と $40 \times 40 \times 10$ (cm) の泥煉瓦を泥のジョイントをつかって積んでいる。ともに同時の建設ならば、どちらかいはづの方法を用いたはずである。ちなみにタパ=サルダールでは 38×38 (cm) の泥煉瓦は 7-9 世紀にあたるその後期のみにつかわれたし [Taddei and Verardi 1984 :

43], タパ=シカングルでも城壁以外の第Ⅱ期建築にはこのサイズの煉瓦だけを使っている。問題の稜堡は南東のものにみられ、のちの建設である。

テペ=マランジャンで稜堡と同時に造られたのは、幅90cmの壁である。南西の稜堡から北へ少し出っ張った壁が平面図にみえる。Carlの平面図(図8)は南西の稜堡から出っ張った壁を示すのにとどまっているが[Carl et Hackin 1959: Fig. C], 報告の写真では、その壁が北西の稜堡までもともと続き、崩れたありさまをはっきり示している[Carl et Hackin 1959: Figs.1, 6]。この事実はFussmanが指摘している[Fussman et Le Berre 1976: 97]。したがって90cm幅の壁は建物の西外の壁龕を塞ぎ(図8のA部分)、建物とストゥーパとをつなぐ出入口を塞ぎ、さらにストゥーパの四周を囲んだ(図8のC部分)。壁は「ちいさい」泥煉瓦と河原石とで積んだと言うから、38×38×9 (cm)の煉瓦を使ったのである。この壁のうち、南西の稜堡から西へ延びる壁の南側に沿って塑像の佛立像と供養者が8体置かれた(図8のD部分)[Carl et Hackin 1959: Figs. 10, 11, 13]。

このように、テペ=マランジャンははじめから佛寺として造られ、第Ⅰ期は方形の建物とストゥーパで構成。ストゥーパに向う壁龕の佛菩薩はこの時期のもの。第Ⅱ期は円形稜堡を取り付け、壁龕に尊像を安置したまま、出入口とともに閉鎖し、またストゥーパの四周を囲んだ。長方形室の階段を取り外して現れた相当に価値の高い金銀貨の隠匿がどちらの時期にあたるかをきめることはできない相談である。その所有を、律に背反するとして、世俗の所有に帰すこともできないし、金銀貨のうちのもっとも新しいものの年代をもって隠匿の時期を決めることも[Fussman 1987: 11-15]、危険である。これほどの数量の財宝は所有が永続するであろうからである。そんなことよりもなおこの遺跡に年代を与えるポイントは、ストゥーパが薄い片岩ばかりで造られていることと、鈍角の壁につくられた円形稜堡と、円圏押印紋土器である。どれもうすく統一した片岩ばかりでつくるストゥーパについてはさきにふれたとおりで、フンドゥーキスターン寺跡のもの[Hackin 1959: Figs. 147-148], タパ=サルダール寺跡の大ストゥーパの右にある小ストゥーパ20や21[Taddei 1968: Figs. 34-37]やストゥーパ64[Taddei 1972: Fig. 15]にみられ、さらにこの64の周囲のミニアチャ城壁[Taddei 1972: Fig. 16]もこの方法の範疇である。フンドゥーキスターンは7世紀末をさかのぼらないことがあきらかになっている[Göbl 1967: 313-314]。タパ=サルダールのこういった建築はその後期の7-9世紀である[Taddei 1968: 124]。テペ=マランジャンの円圏押印紋土器片は方形建物の北側から東側にかけて出土している[Carl et Hackin 1959: 8]。その紋様

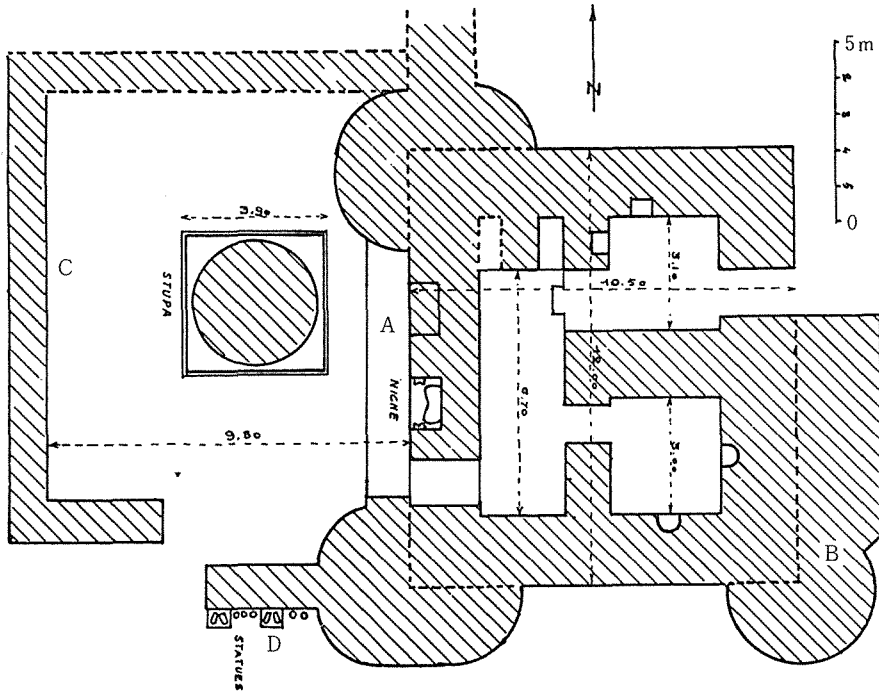


図8 テペ=マランジャーノ寺跡平面図(Carl et Hackin 1959による)

のなかには(図1:32; 図2:46, 52), タパ=シカンダル第Ⅱ期(図1:33; 図2:45, 49)やショトラク(図1:31)と同一のものが認められる(図1:32)。さらに鈍角の壁についた円形稜堡が相方にて認められるから、円圏押印紋土器はテペ=マランジャーノの後期に属する。テペ=マランジャーノの後期はタパ=シカンダル第Ⅱ期と平行関係にある。7世紀以後である。

ベグラーム東方、ショトラクのプランは異常であり、比較の対象を欠く。そのうえに Meunié の発掘とその記述は、ほとんどつかいものにならない[Meunié 1942]。ようやく理解できる点は、主となるストゥーパに少なくとも1回の造り替えがあること、東方のストゥーパ群において前の時期に使った片岩の佛教彫刻を彫刻としてではなく、単なる石材として佛龕を造るために再利用していることなどである。それにもかかわらず、この佛寺とタパ=シカンダルとを時期の点で結び付けるのは、同じ施紋具を使ったのではないかと思わせるほどに類同した円圏押印紋の土器片を出土していることであり(図1:31, 33, 34; 図2:7, 11), 同時にこれらの紋様はタパ=サルダール(図2:8)やグル=ダラ

(図2:12)とも共通である。また鈍角の壁につけた円形稜堡も存在する。したがってこの寺もまたタバ=シカンダルと7ないし8世紀を共有していたはずである。このことはローガルのグル=ダラ[Fussman et Le Berre 1976]についても同様である。Fussmanは、グル=ダラの円圏押印紋について述べるなかで、それまでに円圏押印紋を出土したカーピシーからジャガトゥーにいたる遺跡をあげ、その年代を3世紀から8世紀としている[Fussman et Le Berre 1976:51-52]。3世紀というのは、かれがGhirshmanのあたえたベグラーム第Ⅲ期の年代を疑っていないばかりか、かれ自身の理屈に従っているからである[Fussman 1974]。いまやその理屈は根底から崩れた。筆者はこれらの円圏押印紋を一覧表で既にししたが[Kuwayama 1974A]、1974年以来あらたに判明した例をくわえて図示してみると(図1; 図2)、紋様の種類といい、表現といい、Fussmanに従うなら認めなければならない600年という長期にわたる使用はとうてい考えることができない。円圏押印紋土器は短期の流行である。

以上がベグラーム第Ⅲ期年代の再確認である。カーピシーを中心とする地方の特色である円圏押印紋と円形稜堡とは、確かな年代をもったタバ=シカンダルにおいてそれらが現れることにより、同じようにこのふたつの文化要素をもつベグラーム第Ⅲ期に年代を与えるのである。しかしこうして確認された問題はこのふたつの遺跡だけの問題ではない。カーピシー=カーブルの佛教寺院に対して従来やや古い年代を誰もがなんとなくいできてきたのであるが、その意識の根底にはこの地方に対するカニシュカをはじめとするクシャーンの役割を過大に評価することにあるようである。しかし、ヒンドゥークシュの北なるクシャーンがどのようにこの地方にかかわったかは、なんら判然としていない。第Ⅱ期がクシャーンだとはGhirshmanの年代観を認めるからである。第Ⅲ期の年代に疑問をもったわれわれは同様に第Ⅱ期に対しても懐疑的にならざるをえない。エフタルのカーピシーに対するかかわりもクシャーンの場合とおなじく当然のごとくに受け止められている。これらの問題は将来に残された課題である。しかしいまとくに留意すべき点は、以上の論議からカーピシーの佛教寺院がそんな古いものばかりではないことが理解できたことである。既にこれまで発掘という手続きを経て明らかになったカーピシー=カーブル地方の佛教寺院はおそくとも7-8世紀という時代を確実に経験している。たとえその創建はそれよりずっと遡るにしても。

ヒンドゥークシュをこえる交通路の盛衰は、550年代中葉から560年代に至る、トハリスターンのエフタルの衰退に、おおきく左右されている[桑山正進 1985; Kuwayama 1987]。6世紀中葉以前、インドと中央アジアをむすぶ交通には、遊牧族が北西インド

へむかう動きを含めて、ヒンドゥークシュとカラコルムとの間が主役を演じた。6世紀中葉以後になると、このルートが廃絶し、そのためにガンダーラが凋落し、替わってヒンドゥークシュの西脈が歴史の舞台に登場する。6世紀中葉は歴史の画期である。このルート上にカーピシーが山の南麓における遠距離交易の拠点となり、バーミヤーンが中途の山中で中継ぎ地点となった。ヒンドゥークシュ北側の土器の変遷にてらしてコフナ=マスジド城塞の年代上の位置が動きがたいとすると、6世紀後半に歴史にあらわれたこの交通のついで、ヒンドゥークシュ南側の文化である円形稜堡と円圈押印紋とが、北麓の城塞にあらわれたとみることは無理ではない。玄奘が訪れたカーピシーは、カーピシーがこのような時代を迎えて活況を呈すること70年ののちである。冒頭に記した『大唐西域記』の聖跡は、玄奘の時代にみな生きていたものばかりである。しかも、いちいちがどれというわけにはいかないけれども、その分布と現在の遺跡分布との間の整合性は高い[桑山正進1982:1069-1070]。この点からもまた、6世紀後半から7世紀におけるカーピシーの佛寺やヒンドゥー神祠の存在をあらためて考量すべきである。

引用文献

Antonini, Ch.S.

1977 A short note on the pottery from Tapa Sardar. *South Asian archaeology 1977*, ed. M. Taddei, Naples, 1979.

1979 Note su un'area sacra di Tapa Sardar (Ghazni, Afghanistan). *Annali* (Istituto Universitario Orientale di Napoli), 39-3. 480-490.

Bernard, P.

1964 Les fouilles de Kohna Masdjid. *Comptes-rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-lettres*. 212-221.

Bühler, G.

1892 The praśasti of the temple of Lakkhā Maṇḍal at Madhā, in Jaunsār Mawār. *Epigraphia Indica*, 1. 10-15.

Carl, J.

1959A Le fortin du Saka et le monastère du Guldara (1935). *MDAFA*, 8. 13-18. Paris.

1959B Le bazar de Begram (chantier I, 1936). *MDAFA*, 8. 85-102. Paris.

1959 Le monastère bouddhique du Tépé Marandjân (1933). *MDAFA*, 8. 7-12. Paris.

Cunningham, A.

1871 *Ancient geography of India*. I. *The Buddhist period*. London.

Dagens, B.

1964 Fragments de sculpture inédits. *MDAFA*, 19. 9-40. Paris.

Dani, A.H.

1965-1966 Shaikhan Dheri excavation (1963 and 1964 seasons). *AP*, 2. 17-214.

Fleet, J.F.

1888 *Corpus inscriptionum Indicarum*, 3. London.

Foucher, A.

1947 *La vieille route de l'Inde, de Bactres à Taxila*. *MDAFA*, 1. Paris.

Fussman, G.

1974 Ruines de la vallée de Wardak. *AA*, 30. 65-95.

1987 Coin deposits in North-Western India stupas and their meaning for the archaeologist.

Numismatics and archaeology (2nd International Colloquium), ed. P.L. Gupta and A.K. Jha. 11-15. Indian Institute of Research in Numismatic Studies.

Fussman, G. et M. Le Berre

1976 *Monuments bouddhiques de la région de Caboul*, I. *Le monastère de Gul Dara*. *MDAFA*, 12. Paris.

Ghirshman, R.

1946 *Begram. Recherches archéologiques et historiques sur les Kouchans*. *MDAFA*, 12. Le Caire.

Göbl, R.

1967 *Dokumente zur Geschichte der Iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*, 2. Wiesbaden.

Hackin, J.

1936 *Recherches archéologiques au col de Khair Khaneh près de Kabul*. *MDAFA*, 7. Paris.

1939 *Recherches archéologiques à Begram*. *MDAFA*, 9. Paris.

1954 *Nouvelles recherches archéologiques de Begram*. *MDAFA*, 11. Paris.

1959 Le monastère bouddhique de Fondukistan (Fouilles de J. Carl 1937). *MDAFA* 8. 49-58. Paris.

Ingholt, H.

1957 *Gandharan art in Pakistan*. New York.

Kuwayama, Sh.

1972 The first excavation at Tapa Skandar. *Archaeological survey of Kyoto University in Afghanistan 1970*. 5-14. Kyoto.

- 1974A Kapišr Begram III : renewing its dating. *Orient*, 10, 57-78.
- 1974B Excavations at Tapa Skandar : Second interim report. *Kyoto University archaeological survey in Afghanistan 1972*. 5-13. Kyoto.
- 1976 The Turki Śāhis and relevant Brahmanical sculptures in Afghanistan. *EW* 26-3/4. 375-407.
- 1978 The fourth excavation at Tapa Skandar. *Japan-Afghanistan joint archaeological survey in 1976*. 5-12. Kyoto.
- 1980 The fifth excavation at Tapa Skandar. *Japan-Afghanistan joint archaeological survey in 1978*. 5-15. Kyoto.
- 1987 Literary evidence for dating the colossi in Bamiyan. *Iosephi Tucci memoriae dicata*, ed. Gh. Gnoli and L. Lanciotti. *Serie Orientale Roma*, 56-2. 703-727. Roma.
- Kuwayama, Sh. and Sh. Momono
- 1976 The third excavation at Tapa Skandar. *Japan-Afghanistan joint archaeological survey in 1974*. 5-15. Kyoto.
- Marshall, J.
- 1951 *Taxila. An illustrated account of archaeological excavations carried out at Taxila under the orders of the Government of India between the years 1913 and 1934*, 1. Cambridge.
- Masson, Ch.
- 1841 Memoir on the topes and sepulchral monuments of Afghanistan. In : H.H. Wilson, *Ariana antiqua*. London. 1841.
- Meunié, J.
- 1942 *Shotorak. MDFAFA*, 10. Paris.
- 1959A Begram. Le qala de chantier II (1938). *MDFAFA*, 8. 103-105.
- 1959B Begram. Chantier III. Hors-les-murs (1938). *MDFAFA*, 8. 105-106.
- 1959C Une entrée de la ville de Begram. *MDFAFA*, 8. 107-113.
- Mizuno, S. (ed.)
- 1962 *Haibak and Kashmir-smast. Buddhist cave-temples in Afghanistan and Pakistan surveyed in 1960*. Kyoto.
- 1969 *Mekhasanda. Buddhist monastery in Pakistan surveyed in 1962-1967*. Kyoto.
- Parlato, S.
- 1979 A Brahmī inscription on a mud-plaster floor at Tapa Sardār, Ghaznī. *EW* 29. 265-269.
- Scerrato, U.
- 1967 A note on some pre-muslim antiquities of Ġagatu. *EW*, 17. 11-24.

Schlumberger, D.

- 1963 Book review on H.H. von der Osten and E. Naumann, *Takht-i-Suleiman* (Berlin, 1961). *Syria*, 40. 1963.
- 1964 Observations sur les remparts de Bactres. *MDAFA*, 19. 61-105. Paris.

Taddei, M.

- 1968 Tapa Sardar : First preliminary report. *EW*, 18. 109-124.
- 1972 IsMEO activities : Archaeological mission in Afghanistan. *EW*, 22-3/4. 379-384.
- 1978 Settlement, material culture, architecture and art. In : *The archaeology of Afghanistan from earliest times to the Timurid period*. ed. F.R. Allchin and N. Hammond. 255-299. London.

Taddei, M. and G. Verardi

- 1984 The Italian archaeological mission in Afghanistan : Brief account of excavation and study. *Studi di storia dell'arte in memoria di Mario Rotili*. 41-70. Napoli.

Veuve, S.

- 1974 *La céramique de Kohna Masdjid (Afghanistan). Travail d'études et de recherches présenté, en vue de l'obtention de la Maîtrise spécialisée d'histoire de l'Art et Archéologie, Université de Bordeaux*. Bordeaux.

Wheeler, R.E.M.

- 1962 *Charsada. A metropolis of the North-West Frontier being a report on the excavations of 1958*. Oxford.

桑山正進

- 1971 「タパ=スカンダル第1回発掘調査概報—迦畢試国の翳蔽多伐祠城の比定—」, 『史林』, 54-3. 141-168.
- 1972 「大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか」, 『東方学報』, 43. 1-54.
- 1982 「葱嶺山と阿路孫山」, 『小林行雄博士古稀記念考古学論集』(平凡社). 1067-1085.
- 1985 「パーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道」, 『東方学報』, 57. 109-209.

山田明爾

- 1971 「ウマー・マヘーシュヴァラ像の銘文」, 『史林』, 54-3. 168-175.